

恒存の「理想人間像」を考察する

平成二十七年六月四日

恒存の言論人としての活動は

戦後直後から本格化する

占領開始

↓ 敗戦・占領による混乱・動揺・
混乱の極み

占領政策の

転換期

↓ 冷戦に対する
日本国のアイロニカルな立場

占領終結

主権回復

↓ 主権回復後の日本国家の
あるべき姿と現状

へ恒存の米欧見聞

戦前否定の思い
平和論の思い

冷戦時代

経済成長

↓ 近代化進展に伴ふ
世俗化の悪い抗う

占領開始時の作品に登場する

「理想人間像」の語

「近代の宿命」「理想人間像について」

「小説的理意について」等、共通の主題と見てみる。

自我の差についての痛切・強烈なる自覚の

文藝的表現としての「理想人間像」

・敗戦と占領といふ異変時に恒存は集中的に

より深く本質的に「神・理想人間像」の考察を行なう。

一連の作品に共通する語調の激しさ、

切迫感から、知識人の置かれた危機的状況が

うかがへる。恒存は危機と対峙したと言へるのでは。